

Nāmarūpapariccheda (名色差別論)

— 第三の差別 —

柏原信行

序

Nāmarūpapariccheda は、十二世紀頃、南インドのカーンチプーラ及びセイロン島のムーランマー寺に住んだといふ Anuruddha によって著わされたものである。全篇総計一八五五の偈で構成され、その殆んどが vatta の型式であり、十三章に分けられている。註釈書としては、十二世紀末のセイロンの Vācissara の Nāmarūpaparicchedaīkā と Sumaṅgala によるものがあると言われている。

著者の Anuruddha は、Nāmarūpapariccheda の他に Abhidhammathasāṅgaha, Paramatthavinichaya 及び Anuruddhasatāka を著したといわれる。このほか Abhi-

dhammathasāṅgaha は、Nāmarūpapariccheda をもとにしたと考えられ、両者は内容的には共通している。前者は散文によって単に項目を列挙し、偈によって項目数のまとめをしている。これに対し後者は偈のみで語源解釈や比喩等で説明している。Nāmarūpapariccheda は、未だに翻訳は無いのであるが、南伝阿毘達磨の集約たる Visuddhimagga 等よりも更に発展したものであり、Abhidhammathasāṅgaha の註釈書 Abhidhammathāvibhāvanī も少なからずこの書を参照しており、後世の南伝阿毘達磨の研究には欠く可からざるものであらう。

ここでは、「撰不善(不善のあつまり)」「撰雜(善・不善・無記の混合のあつまり)」「撰善提分(そとりのための項目のあつまり)」を内容とする第三章を取り扱う。これは

Abhidhammatthasāṅgaha の第七章に相当するが、教義

項目の体系づけを主眼とする Abhidhammatthasāṅgaha

とは異なり、特に心・心所という点に注目して捉え、それらの相応関係についても言及している。なお Visuddhimagga では、それぞれの「撰(あつまり)」を独立して扱うのではなく常に修道についての解説の中で取り扱っている。

Nāmarūpapariccheda は JPTS 1913-14 に掲載されている他、セイロン版やビルマ第六結集版などがあり、翻訳にあたってはこの三本を対照した。尚、各末尾の括弧内の数字は、PTS 版及びセイロン版での偈の番号である。ビルマ版は PTS 版・セイロン版での第一一四偈 A、B を一一四、一一五の二つに分けている為、一番ずつずれている。

出来るだけ偈に忠実にならしめるため直訳の体裁をとったが、邦訳上小節の順序を入れ換えた場合もある。尚、小節の切れ目に句読点を置き、一語がまたがる場合は、—とした。

尚お、本稿作成にあたっては、佐々木現順先生の御指導と桜部建先生の御助言を賜った。

第三の差別

一

種類 (bheda) の区別 (pabhedā) については以上の通りであり、次にそれらについての「撰(あつまり)」を、「自性 (sabhava 本来の性質)」と「義 (attha 意味)」を区別することによって、これより後私は説こう。〔一二二〕

実に無類の慧を具え、所依 (vatthu) を遠離された師は、同類のものとして集めて、具眼者 (として) 法を説かれた。

〔一二三〕

一執取 悪見は執着の義により、あるがままの自性としては、他を (param) 執取する (amasati) とするので、この一つは執取 (parāmasā) であると言われる。〔一二四〕

四漏 煩惱の不浄としてのあり方では、傷口からの膿 (assava) の汁のように、相続 (santāna) を汚して (alimpeṇā)、流れる (savanti) と説かれるところの、〔一二五〕

欲愛・有愛、悪見・無明とさう漏 (asava) は、漏という義からは四であり、自性からは三つの法である。〔一二六〕

六

四暴流 また同じこれらは暴流 (ogha) であると言わ

れ、門と所縁とに運ぶものであり、蓋いかぶさって破滅へと、生類 (Garhi) を運び去るものなのである。〔一二七〕

四 軛 また同じこれらは軛 (Yoga) でもあると言われ、生類を有の鉤に、門と所縁とに束縛し、拘置し或いは結びつける。〔一二八〕

四 取 つたが大木に (からみつく) ように、相続をしつかり捉え、蛇が蛙を (捕える) ように、堅固に所縁を捕える。〔一二九〕

欲愛と (悪) 見が、四種の取 (upadana) であり、(悪) 見は見 (取) ・戒禁 (取) ・我語 (取) に分けられる。〔一三〇〕

四 身繫 (名) 身と (色) 身を繫ぎ、逃れ難いように巻きつくものが、身繫 (kaya-gantha) であると説かれ、貪欲・瞋恚・見であり、〔一三一〕

戒禁取、此諦住著、というように見が分けられ、同様にまた四種である。〔一三二〕

六 蓋 出離を妨げ、修習を障碍し、相続 (santana) を卵の殻のように、包んでしまふところの、〔一三三〕

欲貪と瞋恚、惛沈睡眠と疑、無明・悪作、というのが蓋 (niravana) であると考えられた。〔一三四〕

七 随眠 強く取りついて、潜入して働くものであり、持

病のように相続を、随眠する (anusenti) と言われるところの、〔一三五〕

欲貪・有貪、瞋恚・慢・見、疑・無明という七つこそが、六つの随眠 (anusaya) 法であると考えられた。〔一三六〕

十 結 門と所縁とへの束縛として、生類の有の (輪廻の) 輪に於ける、結 (samyojana) であると言われ、罌が鳥を (捕える) のようにであって、〔一三七〕

欲・色・無色 (界それぞれ) の貪 (と) ・瞋・痴・疑、見、戒禁・慢が、掉拳と共に十となるのである。〔一三八〕

色・無色の貪・掉拳を、論では除いて、有貪・嫉・慳を、加えて十となるのである。〔一三九〕

十 煩惱 相続を雑染 (sankilesayanti) し、生類を悩害し、俱生を染汚する (kilesenti) というのが、煩惱 (kilesa) であると説かれ、〔一四〇〕

貪と瞋と痴と、見と慢と疑と、惛沈・無慚・無愧が、掉拳と共に十なのである。〔一四一〕

ここで九に撰せられるのは、見・貪であることが明らかに、七に撰せられるのは無明であり、瞋は五に撰せられ、〔一四二〕

四に撰せられるのは疑であり、慢と掉拳は三に撰せられ、二に撰せられるのは惛沈であり、悪作は一に撰せら

れる。〔一四三〕

睡眠・無慚・無愧、嫉・慳も同様である。以上のよう
に十種であると言われるところの、悪(apaṭaka)のみに於
ける「摂(あつまり)」は、〔一四四〕

取と漏と暴流、軛と取、繫、蓋・睡眠、結・煩惱であ
る。〔一四五〕

群としては十四であるが、区別すれば五十七であり、
如法に従って、心生起に適用されよう。〔一四六〕

これとは別に、非取等によって区別される摂があり、
心・心所・色、涅槃であると説明されよう。〔一四七〕

というように諸の不善法を知ったら、次の摂は、「雜
(善・不善・無記の混合)」というのであると識るべきであ
る。(心) 生起に従えば、どのようであるか。〔一四八〕

六因 貪と瞋と痴とは、専ら不善の三であり、無貪と無
瞋と無痴は、同じようにして善・無記である。〔一四九〕

まさに樹の根の(ような)、堅固なあり方として、諸
法の根としてのあり方として、(これらが) 六つの因
(hetu) 法であると説明された。〔一五〇〕

七禪支 尋と伺と、喜(ṭīti)と同じく一境性と、喜(so-
manassa)・憂、捨という諸受は、〔一五一〕

集中して思念することであり、思念(nijjhāna)の義に

よって、七つの禅法であると言われ、基(vatthu)の自性
からは五つである。〔一五二〕

十二道支 正見と(正) 思惟と、(正) 精進・三離(正語
・正業・正命)、正念と定と、邪見とが存在し、〔一五三〕

正しく(或いは) 邪まに導かれるものであり、導くと
いう義によって、道支は十二と説かれ、自性からは九法
である。〔一五四〕

四食 自体(attaḥava)を転起するものであり、食素
(を) 第八(とする色)・(三) 受、結生(patisandhi)・

名色を、次第の如く運ぶものである。〔一五五〕

段食(kabalikara ahara)、同じく触・思、識という四
つが、食(āhara)であると説かれた。〔一五六〕

二十二根 俱生の諸法の、根の義によって、自己の主宰
者の義によって、同様に随転させるもの(anuvattāpaka)
であり、〔一五七〕

信と念と慧と、精進とまた一境性と、諸受・命・心と、
八つの色根であり、〔一五八〕

ただし命を一として、受を楽・苦、喜・憂、捨に区別
し、〔一五九〕

慧等の道に於ては未知—当知根があるのであり、中間
では已知(根)、終には同じく具知(根)があつて、〔一

六〇〕

自性からは十六のみであり、根の義での分類からは、説かれたところの諸根は、二十二に分類されるであろう。

〔一六一〕

九力 堅固に住著した (adhivṛta) 相続は、敵対者には動かされず、力があるという自性によって、力 (bala) 法は説明され、〔一六二〕

信・念・慚・愧、同じく精進・一境性、慧・無慚・無愧、というこのように九種が考えられた。〔一六三〕

四増上 最勝のものを先とするという義で、福・非福の転起の場合の、増上縁であることによって、俱生について適宜に、〔一六四〕

四増上 (adhivṛta) と言われ、自性からは支配であり、欲と心と精進と、観というようにかくの如きである。

〔一六五〕

五に撰せられるのは慧であり、精進・一境性・また、心は四に撰せられ、また念は三に撰せられる。〔一六六〕

思惟・受・信は、三に撰せられると考えられ、残りは一つずつに撰せられて、二十八であると説かれた。以上このように七種の区別があり、「撰雜 (善・不善・無記の混合のあつまり)」と言われた。〔一六七〕

因と禪支と道支と、同じく食と根と、力と増上こそが、福・非福等の雜 (混合) であり、自性からは三十六、区別すれば六十四である。〔一六八〕

二

以上このように撰めて、その次を説明しよう。心生起の区別に於ては、生起に従えばどのようなであろうか。

〔一六九〕

笑 (起)・転向・(五) 識、領受・推度の、十八 (心) は無因のものであり、愚痴 (心) は一因を持つものである。〔一七〇〕

そして残り (の不善心) と善の智―不相応 (心) は二因を持つものであり、他の心生起の、四十七は三因を持つものである。〔一七一〕

五識は無禪 (支) であり、二禪支があるものとされるのは、第四・第五禪であり、三禪支があるのは第三 (禪) と考えられた。〔一七二〕

そして四禪 (支) があるのは第二 (禪) であり、欲界の樂は除かれる。そして五禪支を持つのは初 (禪)、及び欲界の樂と考えられた。〔一七三〕

初めの無上の禪は、八道支があると考えられ、七道支

ありというのが、残りの無上の禪である。〔一七四〕

世間での初禪（心）、同じく欲（界）に於ける三因（心）は、五道支があるという、心生起があると説かれた。〔一七五〕

残りの上二界の禪（心）と、悪見相応（心）と、智不相応（心）は、四道支があると考えられ、〔一七六〕

瞋恚相応（心）と悪見不相応（心）は、三道支があり、二道支があるのは、疑心であると言われた。〔一七七〕

無因（心）には道（支）は無く、疑（心）に於ては心住であり、離は決定していないので、世間に於ては引き出されない。〔一七八〕

欲（界）に於ては、段―食は非想であり、心生起に於ては一切処で、三つの食ありと言われた。〔一七九〕

諸根を説明しよう。九種が無上に於て覚られ、八種があると云われるのは、世間の三因（心）に於てである。

〔一八〇〕

次に七種があるのは智―不相応（心）に於てであると説かれるべきであり、笑（起心）・確定（心）・不善（心）、また疑（心）に於ては五種である。〔一八一〕

四種・三種が他の、心生起の場合であると言われよう。

三因（心）は七力があり、また六力あるのが二因（心）

であり、〔一八二〕

四力があるのが不善（心）であり、疑（心）は三力があると考えられ、二力があるのは笑（起心）と確定（心）であり、残りは力が無いとされた。〔一八三〕

また速行（心）に於て増上のうち、いずれか一つがあり二因、あるいは三因（心）に於てであって不善（心）に於ては、観は得られない。〔一八四〕

世間に於ける異熟（心）、愚痴根（の心）・無因（心）に於ては、生起に従って言うので、増上は何も無い。

〔一八五〕

身識、善異熟（心）には楽根が、同様に苦根もまた、不善異熟（心）に生起すると言われた。〔一八六〕

推度（心）と笑（起心）は、十六の喜（根）があり、初乃至第四禪は、喜相応なのである。〔一八七〕

憂根は二のみの心生起であると説かれ、またその他の全てに於ては、五十五の捨がある。〔一八八〕

また受の相応は、このように八種に区別され、因相応等の区別によって、心生起があると言われた。〔一八九〕
それぞれの不相応の区別と、また各々の混合を、説かれたとおりに従い、生起のとおりに導くのである。〔一九〇〕

さて以上のように結合させて、心生起に於ける混合があり、更に知らるべきであるのは清浄なる、菩提分の撰である。〔一九一〕

四念処 身と受と心と、法とについては適宜に、不浄・苦・無常・無我であると、よく設立された。〔一九二〕

また正念は、所作の行境の区別から、念処 (sati-paṭṭhana) という名によって、四であると言説された。〔一九三〕

四正勤 已に生じた (あるいは) 未だ生じない悪を、(それぞれ) 捨断し (あるいは) 生ぜしめないために、(また) 未だ生じない (あるいは) 已に生じた不善 (善) を、生じさせ (あるいは) 増大するために、〔一九四〕

精勤している者の精進は、所作と思惟の区別から、正勤 (sammappadhana) という名で、四であると説かれた。〔一九五〕

四神足 神通による足 (の如く) であるというので、神足 (iddhipada) と言われ、欲と心と精進、同じく観というように四種である。〔一九六〕

五根・五力 五即ち信・念・慧、同じく精進・(心) 一境性は、根の義によって根 (indriya) であり、力の義に

よって力 (Bala) でもある。〔一九七〕

七覚支・八道支 念・択法、同じく精進・喜、軽安・一境性・捨が、覚りつつある者にとつての支であるから、〔一九八〕

覚支 (Bojjhanga) という区別によって、七法が説かれた。出離の義によって道支 (maggaṅga) は、正見等の八種である。〔一九九〕

ここで六に撰せられるものは精進であり、念・慧であるとされるのは、五に撰せられるものであるというのであり、定は四に撰せられ、〔二〇〇〕

信は二に撰せられると言われ、残りのものは一つずつに撰せられる。以上このように七種の区別が、菩提分の撰である。〔二〇一〕

念処・正・勤・神足それから、根・力・覚支、そして道の区別が説かれた。〔二〇二〕

欲と心と捨と、信と軽安と喜と、正見と (正) 思惟、(正) 精進・三離 (正語・正業・正命)、〔二〇三〕

正念・(正) 定というのが、菩提分であると説明され、法としては十四であり、区別すれば三十七である。〔二〇四〕

凡そ諸法によって覚りつつある者は、諦を理解し、無

上に達するのである。ただし思惟と喜は無い場合もある。

〔二〇五〕

前の部分に於てもまた得られるのは、適宜に世間に於て、決択（分定）の修習の時に於て、六つの清浄なる転起の時に於てである。〔二〇六〕

以上このように三種の区別が、適宜に説明されるべきであつて、自性の区別によって分けられたものについて、自性と義とによって撰せられたのである。〔二〇七〕

区別の撰は賢者によって説明解釈され、区別の撰は解脱の教説に於てあり、区別の撰の意趣は至上であり、区別の撰の門が説かれた。〔二〇八〕

このように法の自性の分類を覚り、教説の諸法の法主であり、法によってすばらしく莊嚴された心を持ち、法の甘露の味 (rasamata) たる部分を持つものであれかし。

〔二〇九〕

以上が Nāmarūpapariccheda に於ける、区別の撰の分類という第三の差別である。

各偈の註解

この偈は、主として Abhidhammattha-saṅgaha 及び Visuddhi-magga を引用するものによつて、説明解釈に代えるが、

南伝三蔵及び諸註釈書・北伝阿毘達磨論書等の参照、比較検討も不可欠であろう。尚お異本の対照に際しては、PTS 版及びセイロン版の脚注にあげられたものは傷げず、実際に対照した三本にとどめた。

(凡例)

文頭の番号は Nāmarūpapariccheda (PTS 版セイロンの版) の偈の No.

B 本、Nāmarūpapariccheda ユニバーサル第六結集版 1962

S 本、同、セイロン版 1954

Abhs. Abhidhammattha-saṅgaha (JPTS, 1884)

Vism. Visuddhi-magga (PTS, 1920, 1921)

Asl. Atthasālinī (PTS, 1897)

Abhv. Abhidhammattha-vibhāṅginī (シヤム王室版)

122—123 第一二二偈までに心・心所法について説かれ、次に撰不善・撰雑・撰菩提分と三つの撰が説かれる。Abhs. VII p. 325. 互相斥。

122 a. bhedappabhedesu 本 B 本 bhedasabhāvesu

123 a. hāno は B 本 hānehi

124 以下第 148 偈まで撰不善について。Vism. では p. 682

f. 述べ述べられぬ。

執取は Abhs. ではとりあげられていない。

Vism. では「執取とはそれぞれの法の自性を超越して他の不実の自性を摩する行相で転起するから、これは邪見の同義語である。」とやられてゐる。cf. Asl. p. 49, Abhv. p. 216

125—126 漏じこまづ

125 b vanassāvaraso はB本 vanasāvaraso S本 vanas-sāvaraso

vana ㊦ B本 Abhv. p. 215 ㊦㊦㊦ vana と改め。

Abhs. 「四漏は欲漏・有漏・見漏・無明漏」 cf. Abhv. p. 215, 216

Vism. 「所縁としては種姓(智)に至る迄、場所としては有頂に至るまで転起するから、常に流出するとう意味で、

水がめのひびから水が漏れるように、防御しない門から漏れるから、また輪廻の苦が漏れるから、これは欲貪・有貪・邪見・無明の同義語である。」 cf. Asl. p. 49

127 a te evogha はB本 etevogha

127 暴流じこまづ

128 b paṇṇaṇ ㊦ B本 S本共 ㊦ paṇṇo

128 転じこまづ

Abhs. 「四暴流は欲流・有流・見流・無明流、四転は欲転・有転・見転・無明転」 cf. Abhv. p. 216

Vism. は漏の解説に続いて「有の海に牽引するとう意味で、また渡り難いとう意味で暴流でもあり、所縁と離れせず、また苦と離れさせないから転でもあり、それら(欲貪・有貪・邪見・無明)の同義語である。」 cf. Asl. p. 49

129 b maluva はB本 S本共 maluva

129—130 取じこまづ

Abhs. 「四取は欲取・見取・戒禁取・我語取」 cf. Abhv. p.

277

Vism. 「取とはあらゆる行相と、縁起の解釈で説いた欲取等の四である」 Vism. p. 569 に於いては四取を、意味上の

区別、法の応説・略説、順序から詳説。 cf. Asl. p. 385—386.

131 b °anuvehino ㊦ S本 °anuvehino (誤植か)

131—132 繫じこまづ

Abhs. 「四繫は貪欲身繫・瞋恚身繫・戒禁取身繫・此諸住著身繫」 cf. Abhv. p. 226

Vism. 「繫とは名身と色身を繫ぐからであり、貪・瞋等の四である。何故ならそれらは貪欲身繫・瞋恚身繫・戒禁取身繫・此諸住著身繫と説かれてゐるからである。」 cf. Asl. p. 377

133—134 蓋じこまづ

Abhs. 「六蓋は欲貪蓋・瞋恚蓋・憍沈睡眠蓋・掉举悪作蓋・疑蓋・無明蓋」 cf. Abhv. p. 217

Vism. 「蓋とは心の障害物、また覆いとう意味で欲貪等の五である。」 cf. Asl. p. 49

135 c yāpparogā ㊦ B本 yopparogā

135—136 随眠じこまづ

Abhs. 「七随眠は欲貪随眠・有貪随眠・瞋恚随眠・慢随眠・疑随眠・無明随眠」 cf. Abhv. p. 218

Vism. 「随眠とは強くなるとう意味で欲貪随眠・瞋恚・慢・見・疑・有貪・無明とうように説かれた欲貪等の七である。つまり、これらは強くなるから、屢々欲貪等の生起の因として随眠するから随眠である」 cf. Asl. pp. 254, 366

137 a °paddhāni はB本の本共じ °bandhena

138 c sīlabbato はB本 sīlabbatarū

138 d siyunnidasa はB本 dasābhavā

137-139 結についで

Abhs. 「経における十結は欲貪結・色貪結・無色貪結・瞋

恚結・慢結・見結・戒禁取結・疑結・掉挙結・無明結、一方

論に於ける十結は欲貪結・有貪結・瞋恚結・慢結・見結・戒

禁取結・疑結・嫉結・慳結・無明結」cf. Abhv. p. 218

Vism. 「結とは諸蘊を諸蘊に、果を業に、苦を有情に結びつ

けるものだからであり、色貪等の十法であると言われる。つ

まりこれがある限りはそれらの止滅はない。そのうち色貪・

無色貪・慢・掉挙・無明、これら五つは上(二界)に生ずる

諸蘊等をつけるものであるから上分結と言われ、有身見・

疑・戒禁取・欲貪・瞋恚、これら五つは下(欲界)に生ず

る諸蘊等をつけるものであるから下分結と言われる。」

Vism. での結は Abhs. での経中の結に相当」ただし Abhs.

では上分結・下分結の区別はなく、Abhv. でも詳説されな

く。cf. Asl. p. 41

140 a saṅklesayanti はB本 saṅklepayanti

140-141 煩惱についで

Abhs. 「十煩惱は貪・瞋・痴・慢・見・疑・昏沈・掉挙・

無慚・無愧」cf. Abhv. p. 218

Vism. 「煩惱とは自ら染汚されているから、また相応法を

染汚するからであり、貪・瞋・痴・慢・見・疑・昏沈・掉挙

・無慚・無愧、これら十法である。」cf. Asl. pp.386~387

142 九とは、見では執取・漏・暴流・軛・身繫・取・無明・

結・煩惱であり、貪では執取のかわりに繫が入り、そこから

身繫と取を除いて七となり、漏・暴流・軛・取を除いて五と

なる。

143-144 更に身繫を除いて四となり、慢では漏・暴流・軛・

繫・取・蓋を除いて三であり、掉挙は蓋のかわりに随眠を除

いて三となり、昏沈は繫と蓋の二つであり、悪作・睡眠は蓋

に摂せられ、無慚・無愧は煩惱に摂せられ、嫉・慳は論に於

ての結に摂せられる。

144 a middha° はB本 dvīdhā°

145 c nivarana° はB本 nivarana°

146 b paṇḍasa° はB本 paṇḍasa°

146 欲・有・貪欲・欲貪・貪は全て貪とし、見・戒禁取・此

諦住者・我語取は全て取とし、無明は痴とし、昏沈睡眠・掉

挙悪作を二分して、十四とは貪・瞋・痴・慢・見・疑・昏沈・

睡眠・掉挙・悪作・無慚・無愧・嫉・慳という不善心所であ

り、五十七とは漏・暴流・軛・繫・取の各四、昏沈睡眠・掉

挙悪作を分けた蓋の八、随眠の七、経での結の十、経にはな

く論にある結の嫉と慳の二、煩惱の十の合計である。

Abhs. 「このうち漏等に於ては欲・有の名でそれを基とす

る渴愛が意味された。戒禁取・此諦住者・我語取は、このよ

うに転起する悪見そのものを言うのである。漏と暴流と軛と

繫は、基からは三であり、取は二であると説かれ、蓋は八で

あるであろう。随眠は六であり結は九であると考えられた。

煩惱は十であると言われ、この九種が悪の撰である。」cf. A-

bhv. pp. 218, 219

148 この偈から第一九〇偈までは善・不善・無記の撰雜につき

149—150 因ごごご

150 d hetu° は本 hetu°

Abhs. 「六因は貪・瞋・痴・無貪・無瞋・無痴」cf. Abhv. p. 219

Vism. p. 532 「因とは論式の部分・原因・根の同義語である。……中略……以上根の意味で因と言われる。」

151—152 禪支ごご

Abhs. 「七禪支は尋・伺・喜 (pīti) ・一境性・喜 (somanassa) ・憂 (domanassa) ・捨」ごごさ憂は不善の禪支である。cf. Abhv. p. 219

Vism. p. 539 「禪縁は審慮をするという意味で資助となるものである。二つの五識の樂・苦の二受を除く全ての善等に分けられる七禪支である。」cf. Asl. p. 153

154 b nīyanatthena は本 nīyanatthena

153—154 道支ごご

Abhs. 「十二道支は正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定・邪見・邪思惟・邪精進・邪定」cf. Abhv. p. 219

Vism. 「道縁はごごから導き出すという意味で資助

となるものであって、善等に分かれる十二道支である」cf.

Asl. p. 154

154 d 九とは、正邪の思惟・精進・定を各々一つずつにしたため。Abhs. 「基からは道支は九」

155—156 食ごご

Abhs. 「四食は段食・第二触・第三意思・第四識」cf. A-bhv. p. 222

Vism. p. 341 「食とは運ごごとである。これは段食・触食・意思食・識食の四種である。ではそのうち何が何を運ぶのか。段食は食素を第八とする色を運び、触食は三受を運び、意思食は三有に結生を運び、識食は結生の剎那に名色を運び。(以下略)」cf. Asl. p. 45

157—161 根ごご

Abhs. 「二十二根は眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・女根・男根・命根・意根・楽根・苦根・喜根・憂根・捨根・信根・精進根・念根・定根・慧根・未知当知根・已知根・具知根」cf. Abhv. pp. 220~221

Vism. p. 491 f. 「根の意味はごごであろう。帝釈 (Inda) の相という意味が根の意味であり、帝釈によって示されたという意味、帝釈によって見つけられたという意味……帝釈によって生起したという意味……帝釈によって習われたという意味が根の意味である。」ごごの帝釈は世尊を意味すると思われるが、四番目の帝釈は業を指す。根の詳細ごごは、cf.

Vism. p. 443 f.

158 八つの色根とは眼乃至身根・女根・男根・命根、心とは意根を指す。

159 a katani は B 本 kathan

159 「ただし命を一として」とは、女根・男根とは別に命根を立てること。Vism. p. 492 「かの身体がこれによって女・男と言われるそのある法を示すために、ここに女根・男根がある。それらは両者とも命根に結びついて生きてゐることを示すためにここに命根がある。」

Abhs. 「命根には色・非色の二種がある。」

160 未知当知根は修習の前に、具知根は漏尽者に生起する。

Abhs. 「根では須陀洹道智は未知当知根、阿羅漢果智は具知根、中の六智は已知根と言われる。」 cf. Abhv. p. 221, Vism. p. 491

161 十六とは、楽・苦・喜・憂・捨の諸根を受とし、未知当知根・已知根・具知根を慧根とするから。

Abhs. 「基としては……根法は十六」

162—163 力にこころ

Abhs. 「九力は信力・精進力・念力・定力・慧力・慚力・愧力・無慚力・無愧力」 cf. Abhv. p. 221, Asl. p. 124 「不動の意味で力であると知るべく。」 Asl. p. 153 「震動しなごう意味で七法が力である。」

164 b puññāpuññāpavattiyam は B 本 puññāpuññāpavattiyam

164 c paccayādhīpateyyena は B 本 paccayādhīpateyyena

165 b adhipacca は B 本 adhipacca。

164—165 増上について

Abhs. 「四増上は欲増上・心増上・精進増上・観増上」 cf. Abhv. p. 222

166 五とは因・道支・根・力・増上。四とは、精進は道支・根・力・増上、一境性は禅支・道支・根・増上、心は根・増上、食のうちの二・三とは道支・根・力。本偈と次偈前半、Abhv. p. 224 に引用。

167 b saṅganīta は B 本 S 本共に saṅganīta

167 この偈と次の168偈は一行ずつ多く B 本、S 本共に三行ずつになつてはいるが、形としては三つの vatta である。

二とは、思惟は禅支と道支、受は禅支と根、信は根と力。二十八とは貪・瞋・痴・無貪・無瞋・無痴・喜 (pīti) ・正見・正語・正業・正命・邪見・眼・耳・鼻・舌・身・女・男・命・慚・愧・無慚・無愧・欲・段 (食) ・触・(食) 意思 (食)。

168 a maggaṅga は B 本 maggaṅga

168 c balādhīpattito は B 本 balādhīpattito

168 d missato は B 本 missata

168 e sattihi は S 本 sattahi

168 福・非福等とは、善・不善・無記。三十六とは、無痴・慧、未知当知・已知・具知根、観を慧とし、正思惟・邪思惟を尋とし、正定・邪定を一境性とし、五受を受とし、意識を心として、貪・瞋・痴・無貪・無瞋・慧・尋・伺・喜 (pīti) ・一境性・受・見・正語・正業・正命・精進・念・眼

根・耳根・鼻根・舌根・身根・女根・男根・命根・意根・
信・慚・愧・無慚・無愧・欲・心・段食・触食・思食。六十
四とは因の六、禪支の七、道支の十二、根の二十二、力の九
増上・食の各四。

169 c *cittuppadappabhedesu* は B 本 *cittuppadapabhedesu*

169 以下第一九〇偈まで撰雜の諸法と各心の相応について

170 a *viñāna* は B 本 *viñānaṃ*

170 c *ca* は B 本 *va*

170 d *c'eka* は B 本 *eka*

170 十八とは欲界十八無因心。愚痴心とは十二不善心中の捨
俱疑相応心と捨俱掉拳相応心。

171 残り(の不善心)とは十二不善心中の貪根と瞋根の十心。

善の智不相応(心)とは欲界の二十四有因心中の智不相応の
十二心。その他は智相応の十二心と色・無色・出世間の心

172 d *matan* は B 本 *matā*

172 五識は無禪(支)とは、禪定の際の所縁は具体的な實際の
境ではないから、欲界十八無因心中の善・不善の五識には禪
支はない。(禪定の際の心の所縁は似相(*patibhaga-nimitta*)
であるが、禪支は取相(*uggaha-nimitta*)を所縁とする意識
界にもある。cf. *Abhs.* p. 42, *Vism.* p. 125 f.

173 *hujj* の樂とは喜俱心を意味する。喜俱心は受の喜 (*so-*
manassa) の他、喜 (*piṭṭi*) とも相応するから五禪支となる。

174 a *pathamānuttajjhānaṃ* は B 本 *pathamānuttaraṃ*
jhānaṃ

174 初めの無上の善とは出世間初禪心、八道支とは十二道支
中の正八支。七道支とは正思惟を除く。

175 世間の初禪とは色界の初禪心、欲界に於ける三因心とは
智相応心。五道支とは正八支から正語・正業・正命の三離を
除く。

176 残り上三界の禪とは、色界の第二乃至第五禪心と無色界心。
四道支とは、禪支では正見・正精進・正念・正定、悪見相応
心では邪見・邪思惟・邪精進・邪定、智不相応心では正念・
正思惟・正精進・正定。

177 a *paṭigh'ucca* は B 本の本共に *paṭighuddhacca*。

177 c *maggaṅgā* は B 本 *maggaṅgaṃ*

177 三道支とは、邪思惟・邪精進・邪定、二道支とは邪思惟
と邪精進

178 c *viratanīyatatā* は B 本 *viditānīyatatā*

178 *Abhs.* 「無因には道支は得られなから疑相応心にも定は
相応するが、力が微劣であるため、邪定とは言わず心住と呼
ばれる(cf. *Vism.* p. 471, *Asl.* p. 263)」。三離は *Asl.* p. 157
では欲界の善心とも相応するとやれつはるが、*Dhamma-*
sāṅgani p. 63 などでは出世間心とのみ相応するものと記や
れつはる。 *hujj* は *Vism.*, *Asl.* の著者 *Buddhaghosa*
の説はとり上げられなかったであろう。

179 a *kabaḷīnkāro* は B 本 *kabaḷīnkāro*, S 本 *kabaḷīnkāro*

179 b *anāhārā* は B 本 *anāhāro*

179 食の相応について。第 155 偈の註参照

180 第182 偈前半迄根の相応について。九種とは命・意・

受・信・精進・念・定・慧・三無漏根のうちの一。無上とは出世間心。八種とは出世間心相応の九種から三無漏根を除く。世間の三因とは色・無色界心と欲界智相応心。

181 c vottappanā は B 本 vottappanā

181 七種とは八種から慧根を除く。智不相応とは欲界智不相応心。笑起とは喜俱笑起心、確定とは確定心即ち捨俱意門転向心、不善とは十三不善心から捨俱疑相応心を除いた他の心。五種とは七種から信根と念根を除く。

182 b dvihetukā は A 本 duhetukā

182 四種とは五種から定根を除く。三種とは更に精進根を除く。残りの心生起とは、確定心と笑起心を除く無因心、即ち二の前五識、領受心・推度心及び五門転向心。この偈の後半と第一八三偈は力の相応について。三因とは三因心。即ち智相応心と色界・無色界・出世間心・七力とは信・精進・念・定・慧・慚・愧の諸力。二因とは、ここでは智不相応の欲界心のみを指し愚痴心以外の十不善心は含まない。六力とは、三因心相応の七力から慧力を除く。

183 a catubala² は B 本 catubala

183 c vottappanā は A 本 vottappanā

183 四力とは精進・定・無慚・無愧の諸力。不善とは疑心を除く不善心。疑とは疑相応心。三力とは不善心相応の四力から定力を除く。二力とは精進力と定力。残りとは確定心と笑起心を除く無因心。

Abhs. 「無精進には諸力は得られない。」(確定心・笑起心以外の無因心には精進心所はない。)

184—185 増上の相応について。速行とは速行心、即ち出世間心、世間の善心と異熟心、笑起心、及び十二不善心。ただしここでは笑起心と二つの愚痴心は除く。いずれか一つとは、増上は同時に一つ以上は起り得ないから、三因とは三因心、即ち色・無色界・出世間心と欲界智相応心。二因とは欲界智不相応心を指す。不善とは愚痴心を除いた不善心。観は得られずとは、二因心と不善心には観(慧)は無いから。世間に於ける異熟とは欲・色・無色界の異熟心。愚痴根とは疑相応心と、捨俱掉拳相応心。無因とは無因心。これらには増上は生起しなご。cf. Vism. p. 492. Asl. pp. 211-213, 359., Abhv. pp. 221-223.

186—189 受の相応について。

186 善異熟心中の樂俱身識と苦俱身識を指す。

187 喜俱推度心・喜俱笑起心、欲界の不善・善・異熟・唯作各四の喜俱心・色界・出世間の初〜第四禅心。

188 a domanassayutā は A 本 domanassayutā

188 d pañcapaññāsu pekkhā は B 本の本共 Pañcapaññāsu 'pekkhā

188 憂俱は不善心中の憂俱瞋恚相応有行心と同無行心。その他の全てに於ける五十五とは、不善心中の六、善・不善の眼〜舌識の八、善・不善の領受心・推度心の四、五門・意門転向心、欲界善・異熟・唯作各四の捨俱心・色界三・出世間八

の第五禪心、十二の無色界心の合計。cf. Abhs. III-1 p. 11.

189 d samrīṭā は B 本 pakasitā

189 八種とは、身識の善異熟と不善異熟、推度心、笑起心、

十六の欲界喜俱心、初々第四禪心、憂俱心、捨俱心の八種。

この偈後半と次偈は、以上因、禪支、道支、食、根、力、増上、受の心との相応・不相応についてのあとがき。

191 以下206まで撰菩提分につづいて。Vism.に於ては、pp. 678

～681に解説。

191 b missitam は B 本 S 本共に missakam

191—192 念処につづいて。

Abhs. 「四念処は、身随観念処・受随観念処・心随観念処・法随観念処」 「四念処は一つの正念である。」

Vism. 「それぞれの所縁に出入して起るから (upatthānato) 処 (upatthāna) である。念即ち処であるから念処である。そして、これは身・受・心・法に於ける不浄・苦・無常・無我の行相を捕えるもの、また浄・楽・我・常の想を捨断するものとして転起するから四種に分けられる。それ故四念処と言われぬ。」 cf. Abhv. p. 224.

194 b pahāna. は B 本の本共 pahāna.

194 c anuppannuppannāpāpa は B 本 anuppannuppannehi
vā

194—195 正勤につづいて。

194 b pahānanuppadānāya は B 本 S 本共に pahānanup-
padānāya

Abhs. 「四正勤は、已起諸悪捨断のための精進、未起諸悪不起のための精進、未起諸善生起のための精進、已起諸善増大のための精進。」

Vism. 「これをもって勤めるから勤である。良い勤が正勤である。又はこれを以て正しく勤めるから正勤である。又は、これは煩惱の醜さがないから美しく、利益・安楽を生じさせるという意味で最勝の状態をもたらすから、また優れた状態にするから勤であり、それ故正勤である。これは精進の同義語である。これは已起・未起の不善の捨断・不生起の作用、已起の善の生起・増大の作用をなすから四種である。それ故四正勤と言われる。」 cf. Abhv. p. 225

196 神足につづいて。

Abhs. 「四神足は、欲神足・心神足・精進神足・観神足」
Vism. 「前に説いた成功の意味で (ijjhānatiṭṭhena) 神変である。それと相応するから、前行の意味で、また果となるから前分をなすという意味で神変の足であるから神足である。これは欲等として四種である。それ故四神足と言われる。たとえば「欲神足・精進神足・心神足・観神足という四神足がある。」というのは世間に於てのみであって、他に世間では「若し比丘が意欲を主として定を得、心一境性を得れば、これは欲定と言われる。」などのことばがあるから欲等を主として得られた法である。」 cf. Abhv. p. 225

197 五根・五力につづいて。

Abhs. 「五根は信根・精進根・念根・定根・慧根、五力は

信力・精進力・念力・定力・慧力。」

Vism. 「不信・懈怠・放逸・散乱・昏迷に打ち勝つから、勝と称する増上の意味で根であり、また不信等によっては打ち敗かされないから不動の意味で力である。兩者共に信等として五種である。それ故五根・五力と言われる。」

cf. Abhv. p. 224

198 sati はB本S本共に sati

198 c ekaggatopekkhā はB本 ekaggatāpekkhā

198—199 覚支と道支について。

Abhs. 「七覚支は念覚支、択法覚支・精進覚支・喜覚支・

軽安覚支・定覚支・捨覚支。八道支は正見・正思惟・正語・

正業・正命・正精進・正念・正定。」

Vism. 「覚る衆生の支分として念等の七が覚支である。ま

た出離の意味で正見等の八が道支である。それ故七覚支・八

支聖道と言われるのである。」cf. Abhv. pp. 225-226

200 六とは正勤・神足・根・力・覚支・道支。五とは、念で

は念処・根・力・覚支・道支、慧では念処・神足・根・力・

道支。四とは根・力・覚支・道支。

201 一とは根・力。

202 b °dhanā はB本 °dhanato

203 三離とは正語・正業・正命。本偈は Abhs. p. 34, VII-7

に引用

204 c cuddasa はS本 cuddasa

204 十四とは、念・精進・欲・心・慧・信・一境性・喜・輕安・受・尋・正語・正業・正命。三十七は念処・正勤・神足の各四、根・力の各五、覚支の七、道支の八の合計。

Abhs. 「一正念が四念処、同じく正精進が正勤と言われた。

欲と心と捨と、信と輕安と喜と、正見・思惟、精進・三

離、正念・定というように、自性からは十四である。その

うち、区別すると三十七であり撰は七種である。思惟と輕

安と喜と捨と欲と心と三離の

九は一処に、精進は九処に、

念・定は四、五が慧、

信は二処にあり、これら三十七法の

最勝最上の分別である。

出世間には全てがあるが、思惟・喜の無い場合もあり、

(205に相当)

世間には六清淨の転起の時に適宜にある。(206に相当)。」

cf. Vism. p. 696 (Pis I, p. 27)

207 d sabhāvatthehi はB本 sabhāgatthehi

208 ㄱの偈の形は rathoddhata

209 ㄴの偈の形は dothaka

209 d bhavantu はB本 bhavanti